セットで用いられた人形

（実物大　※左：カラー写真　右：赤外線写真）

人形の出土状況（平城第566次東区　朱雀大路西側溝）

短冊状の木札に切り込みと入れて、人間の形を表現したものを人形（ひとがた）と呼びます。奈良時代にはこの人形を用いた祭祀がおこなわれていました。人形に自分の穢れ（病気や災い）をうつし、呪（まじな）いをかけて溝等に流すことでそれらを払おうとする行為です。2016年に実施した朱雀大路西側溝の発掘調査でも、15点以上の人形が出土しました。古代人が穢れをうつして流した人形を現代のわれわれが偶然発見した、というわけです。

さて、ここに示したのはその調査で溝の西岸からまとまって出土した5点の人形です。いかがでしょうか？左上の2点ずつと右下の3点ずつは、人形の作り方や墨書の様子がとてもよく似ていると思いませんか？例えば左上の2点。やや撫で肩で腕から脚に向かってやや外に開く外形、そして彫り込みと墨書で表現した顔が酷似しています。墨で塗りつぶしたおでこ、たれ目、大きな口とその周りに描かれた放射状の髭と思しき墨線…。何ともリアルで、夢に出てきそうです。下の3点はどうでしょう。こちらは、撫で肩で腰部にV字の切り込みをもつユニークな外形、顔は輪郭線で囲んでその中に目、鼻、口、髭を墨書し、さらに胴部にはいくつもの波線や直線を描く表現が一致します。胴部を埋め尽くす波線や中央の「ロ」の字が、いったい何を意味するのか、残念ながらよくわかっていません。一般的な人形は、目、鼻、口だけを線で表現するため、これほど墨書がみられる人形はかなり稀です。今回の発見は人形のバリエーションを知る上でも重要といえます。

では、なぜ瓜二つの人形が複数枚あるのか。これは人形がセットで用いられたためと考えられます。しかもこれらは同じ場所から出土しているので、それらを一緒に流した可能性が非常に高いのです。穢れを何枚もの人形にうつし祈る古代人の姿が蘇ってくるようです。

（都城発掘調査部　芝 康次郎）